



明
木加
第 666
卷 X



言靈真洌鏡 十寸鏡 益鏡 氏云

	外	中道	内	
高	き	け	く	か
天	ぎ	げ	ぐ	が
棚	ち	で	づ	だ
天	ち	て	つ	た
之	り	れ	る	ら
棚	に	ぬ	ぬ	の
中	ひ	へ	ふ	は
津	し	せ	す	さ
棚	し	せ	ず	ざ
地	び	べ	ぶ	ぼ
之	び	べ	ぶ	ぼ
棚	み	め	む	も
根	ひ	ひ	ひ	ひ
之	ひ	ひ	ひ	ひ
棚	ひ	ひ	ひ	ひ
	牙	舌	齒	喉
	韻	韻	韻	韻
	留	外	内	初
	柱	柱	柱	柱

言靈聞書

○言靈の譯

抑け言靈の道なきふり天地物とありふあり
 近きもの今後くの口共内、あや何れ中此の書成
 言靈流傳と成さむもまてふ口印記の記部系集
 にならば中道書改なり中傳えさぬ恙をふらふ
 出流り何れは何れもて早と正しむ今けも復流を
 言靈をそとふの親類ふして志も人乃こそ成りて
 成り物といはれん天地より自然不倚言靈なりて
 人の形をぬる者、後くの肉ふけ御鏡の道成



備りて自然之聲を内り籠りたまふ津に学ぶ
をわくしてはとまふ事一 又音と韻の深と云は声の
所あるべき事と多つ中なりあつては必らず
一系の思ふて声小音韻乃ちナリ也聲の極る所
音と云ひ声の極る所を韻と云ひ△音ハ極る
上たなびくあふ方に流れて又△音ハ重なりて
下に流るあり地ハ流れてあふ事ハこれハ声ハ喉唇
歯舌牙の五所より發して又ハ五つハ筋氣とのち
まとなる声と云て云々まといふ声の極るハ喉唇
歯水々阿の筋と極るは喉の筋なりさればまといふ

声ハ唇よりあつて喉の筋ハ声ハ足と唇ハ音
喉ハ韻くと註せり又せといふ声とあせば其息必歯ハ
齒ハ是歯の音なり於けせといふ声ハ尾急に音なれ
滑の韻とるハ是歯よりあつて舌ハ筋ハ声ハこれ
の聲と歯の音と韻くと註せり又聲ハ此に其極の筋と
極る所ハ別なり有りては極る所を音と留るは極る
所ハ韻と云ふ是音韻の分なり
○ 三返の釋
又之段ハ衣繪印等の之聲の口よりあつては
喉中重の口より有り極る声ハなるは是上之位

重兒声ハ強クも下小位一ハ不怪不重全非なるを
列申ふ位也

ヤウア ホボ七 フズス テレ子 キギチ 是るを

ヤウア の三声ハ 喉の音の 怪申重

ホボ七 の三声ハ 唇の音の 怪申重

フズス の三声ハ 歯の音の 怪申重

テレ子 の三声ハ 舌の音の 怪申重

キギチ の三声ハ 牙の音の 怪申重

右喉唇歯舌牙の五つの声者一音毎ハ怪申重に
二つぬ一音と声と成る事と之候の二つちと云

○ 五棚の譯

又五棚ハ音の合所五柱ハ韻の合所一ハ是
云語の祝儀の定る源なり

音を者ハ怪申重に合して三声とるり三声又五韻ハ
二つぬ一と五十五声とる事と一棚と云ふ

先牙の棚とて云ハ牙の三音ハギの音なりけギの音を
怪く唱へハキとるり重く唱へハチとるりけキギチの

三声ハ多ク五韻ハ分して三十五声とるり相集て一棚
となすけ牙の音の二棚は高天原の棚と云ハ

あり深空の棚と云ふ

心月の音の下に舌の音なり

舌の正音ハレの音なりけレの音を怪く唱へハテとるは
重く唱へハ子とるにテレ子の三声各五音に分きて
之五十五声とるを相乘して一極とるに舌の音の一極を
是て天の極とるを準て之極は自は是

其音は

カガタ	メラナ	ハササ	ハバマ	ヤウノ	十四声ワ	阿の音キ
コゴト	トロノ	ホリゾ	ホボモ	ヨチノ	十四声ワ	遠の音キ
クグツ	ツルヌ	フスズ	プブム	エウノ	十四声ワ	字の音キ
ケケテ	テレ子	ヘセセ	ペペメ	エエノ	十四声ワ	清の音キ
キギテ	ケリニ	ヒシジ	ビビミ	井イノ	十四声ワ	為の音キ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

為の音ハ心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

心阿遠字清為の五音乃調子の次第と云く阿の音ハ

残音もも類と調子に備りある物として調子とけらふ
正しては何れもアチウエイとけらるるその也の
家ふつうのそと澄澄をいふするてのこるけらるる
まゆみられと母ふけりりよれい音をまする物なる也
音と歌とを物と終之味縁笛を歌はみなるもの類なり
い内にも曲めよく調子のけりあるハニ味縁なり是は
御あふおめていと趣き笑るれとも音も在今のけりち
なりきは元手返くそとめてアはハ丈ニ味縁ハ古音の
怪き声メトツテチの五声か南をそと調子の次声ハ先ト
ツシテシシとらるるべき例アチウエイと歌なり先と歌く

調子極音をけ縁ハ是一の系乃ちある音もそと例
タハアの歌なりトシと歌く調子ハアの歌なり又さ
是一の系乃ちあるそと例ト是をの歌なりツシと歌く
調子ハアの歌なり又さハ是一の系乃ちあるかそと
例テハ上の歌なりチシと歌く調子ハエの歌なり又さ
是一の系と押ノある音もそと例チハ為の歌なり
調子の底記より次声ハ先トツテチの五声メトツテチ
とらるるひて歌もハアチウエイとけらるるその也の
のちんぬとらるる音ハ底の怪き声も南をそと
譜とめてそと古の申音ラロレリに音もそと地ハ澄と

知る人ふらけられよとてしめりぬは、昔年近き唇の音
よそいそと

笛ハフピ 別アウイの敵なり

車ガジギ アナウイの之極なり

こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと
こつこつとこつこつとこつこつと

笛車らへてめけ箱物の静アチウエイの此舟此敵と
なりて是別とて深遠の娘中終のつらとてなるは
於天地の音ハ飛舞らるもの相おこ音とつたはとつ
よのち——音らきハ必敵と静あれハ必濁子たりて

志うも其地のあつた静とてうたのちもとも歌そののハ
け濁るなりきとてやうらうらものハを敵と所とをよの
ニッふ暮り ^{ガアタ} _{ボト} 又種ち地よのハ字の静なり ^{カツ} _{コツ}
又うたのハを敵と静と為との二敵ふ暮るものよて
そ次舟自絶ふアチウエとる是皆天地自然の
る音のよそとて人に人のエとてりてなせよとてにうたに
静ふ小静るまの音も子茶ふまぶく秋の虫も何をも
音られハ敵とて名と濁る成日くものなるもせう
されハ朝露の梅もまなく音のいとまをうて去来なる
雲の静ふ小静らる鯛のいとまを——音ふらけられなるも

学ひて声をとくもいふあはれん唯歌と調のなるを
つらなりこれい

いふものい 声 なるを

あふものい 声 やち

あふものい 声 うる

うをものい 声 をり

是皆自然のなるをいふれ人の流るる声の目くら
まといはれしふ亦えいふに必る者いもの
声を中ししにそのいふはれはけつるま
いれぬるを清きやち疾も目くらまの地

其声度きあえいおれい中声いとい
むる

笑の声泣く声 アイン 声ハ度 イソ 至る

鳥の声 鳥ハ天 鳥ハ天 鳥ハ天 鳥ハ天

鳥ハ天 鳥ハ天 鳥ハ天 鳥ハ天

○通 天中道の譯 四言ト云

又言の意ふは 三の列ちきて内柱外柱中柱の三種
とるは 中の内外の二つ有えの象の及二柱ありて
是自他と目くらまは存なり

天中道と云ハ他 天中道と云ハ他 天中道と云ハ他 天中道と云ハ他

行書 碌漕持立取遣押テ

なとのめく自他よりぬる。濁なり皆は方ある。こ
凡て中柱の詞ハ五音ふるぬりて詞の活動と成る
あり通韻ト云

其活動する自他の中柱の字の音と詞の辨なりて
自他通音を用い内柱の音の音自己の思詞とる
外柱の音の音と他より詞とるなり。初柱の所の音
なりて其の音とるなり。内柱の音の音なりて
其の音ぬるなり。凡て詞を音の音の中柱ハ中道の
活動なり。凡て詞の用なり其音解なり。凡て

後 ユカ モト ネ ト ロ ヤ ロ 是の詞ハ俗言として其の用は
今ハ音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。

なとのめくを音とる。詞ハ内柱の活動して自心
他の音ハ音とる。凡て詞ハ内柱の活動して自心

是心ニ思所ニ未取有ハ音とる

ユ カ リ モ ツ ト ル ヤ ル ノ メ ク ウ ハ カ ク 詞 ハ 中 柱 の 音 言
ハして自他より用ゆる。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。
ユ カ リ モ ツ ト ル ヤ ル ノ メ ク ウ ハ カ ク 詞 ハ 中 柱 の 音 言
是自他の用ゆる。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。
凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。
凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。
凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。凡て音の音なり。

将行^{ユカム} 将書^{カム} 将持^{モテム} 将立^{タテム} 将取^{トラム} 将遣^{ヤラム} なるものゆく阿^ア 敬^ケ
 詞^{イニシエト} 是^{イニシエト} 始^{イニシエト} 末^{イニシエト} 言^{イニシエト} と習^{イニシエト} して又^{イニシエト} と始^{イニシエト}
 終^{イニシエト} たり 沛^{イニシエト} 報^{イニシエト} なるれい其^{イニシエト} の成^{イニシエト} なるいむと生^{イニシエト} する或^{イニシエト} には亦^{イニシエト}
 有^{イニシエト} 不^{イニシエト} 将^{イニシエト} と云^{イニシエト} 中^{イニシエト} のとをてらるるをけしといふ
 二^{イニシエト} キ^{イニシエト} カ^{イニシエト} キ^{イニシエト} 七^{イニシエト} 子^{イニシエト} 子^{イニシエト} トリ^{イニシエト} ヤリ^{イニシエト} なるものぬふ敬^{イニシエト} 詞^{イニシエト} を留^{イニシエト} 住^{イニシエト} の
 活^{イニシエト} 動^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} 活^{イニシエト} 去^{イニシエト} 言^{イニシエト} と習^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} 習^{イニシエト} するなり
 詞^{イニシエト} の沛^{イニシエト} 報^{イニシエト} なるれい 是^{イニシエト} 詞^{イニシエト} なるものゆく阿^{イニシエト} 敬^{イニシエト}
 たり 敬^{イニシエト} 始^{イニシエト} 終^{イニシエト} なるれい 字^{イニシエト} の敬^{イニシエト} たり 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の活^{イニシエト} 動^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} と
 今^{イニシエト} 言^{イニシエト} と習^{イニシエト} して今^{イニシエト} 唯^{イニシエト} 々ののりなり 是^{イニシエト} 少^{イニシエト} 報^{イニシエト} なるれい 亦^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の二^{イニシエト} 程^{イニシエト} と
 たり 自^{イニシエト} 然^{イニシエト} なるれい 始^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の二^{イニシエト} 程^{イニシエト} とするは 亦^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の末^{イニシエト} 今^{イニシエト} 過^{イニシエト}

活^{イニシエト} 動^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} 活^{イニシエト} 去^{イニシエト} 言^{イニシエト} と習^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} 習^{イニシエト} するなり
 詞^{イニシエト} の沛^{イニシエト} 報^{イニシエト} なるれい 是^{イニシエト} 詞^{イニシエト} なるものゆく阿^{イニシエト} 敬^{イニシエト}
 たり 敬^{イニシエト} 始^{イニシエト} 終^{イニシエト} なるれい 字^{イニシエト} の敬^{イニシエト} たり 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の活^{イニシエト} 動^{イニシエト} するは 是^{イニシエト} と
 今^{イニシエト} 言^{イニシエト} と習^{イニシエト} して今^{イニシエト} 唯^{イニシエト} 々ののりなり 是^{イニシエト} 少^{イニシエト} 報^{イニシエト} なるれい 亦^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の二^{イニシエト} 程^{イニシエト} と
 たり 自^{イニシエト} 然^{イニシエト} なるれい 始^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の二^{イニシエト} 程^{イニシエト} とするは 亦^{イニシエト} 中^{イニシエト} 程^{イニシエト} の末^{イニシエト} 今^{イニシエト} 過^{イニシエト}

○ 通外言の譯

夫^{イニシエト} 外^{イニシエト} 言^{イニシエト} と云^{イニシエト} 他^{イニシエト} のものよりなり 是^{イニシエト} 詞^{イニシエト} と集^{イニシエト} 集^{イニシエト} なる一^{イニシエト} 種^{イニシエト} と

ふし一果て外言といふも一とを云ふ

高_レ低_レ廣_レ狭_レ遠_レ近_レ輕_レ重_レ暑_レ寒_レ
右形ナリ仕方ナラス
空ニ無形ナリ

るとのめく他よりたつる詞なり

是_レてい外言の詞を三音ふおひて詞の活動とるを

足とある通言といふ其活動いふは須後申候(又)の極乃

①の音を詞の辨とるして音大の候の(キ)の音を他ふ

宛詞とるしある塞津段の(為)の音を自定_ル詞とる

②の音を自他_ル働_ル詞とるん

御鏡出顯之圖教示 三棚五段五柱ノ詞

○言靈有須鏡乃来由 前序之年

貴と此と須後_レ言の急此御靈と歌を宗原_レて

言のくは_レ思とる隅角の沛後_レなりされいふ

天地_レ穿_レて_レ中_レふ_レ萬_レの_レの_レ歌_レる_レ物_レふ_レ三_レの_レ別_レち_レあり

アラシク
クシメタニ
ヌルシク
顯靈 隱靈 寢靈 ト云

顯靈、發情のものをしてして音を歌を物_レの歌を云い

隱靈、内情のものをしてして音を歌を物_レの歌を云い

寢靈、悲情のものをしてして思ひを物_レの歌を云い

物_レふ_レ人_レを_レ三_レ音_レの中_レ乃_レは_レく_レも_レれ_レ音_レふ_レの_レ別_レと_レなり

韻_レふ_レ三_レの_レ調_レを_レ歌_レを_レ物_レの_レ韻_レを_レ志_レして_レ音

怪_レし_レ上_レふ_レも_レる_レび_レや_レ音_レ重_レし_レ下_レに_レは_レく_レれ_レ全_レく

各ハ
詞ハ

物の形不付て相する
形アレハ別名有り各ハ此方ヨリ
押止タル物也
詞ハ心ヨリ起心ハ天ヨリ受メルコ
天ノ動リ「天理或問ニテ可知

故ハ本を物に附てふ動詞を不始めてうつく
是天地自然不動靜あるらぬ

結ハ

為詞を造りて玄理の活動とるを以てし
言なり是天地なりと之とも和合含うるゆかりハ
第相するゆかりハ為詞と之とも造りの盡むれ
時を玄理の活動とるゆかりハ 有る盡ハ天地の
和合なるゆかりハうにるゆかりハ是之なり
在ハ詞彙の之と大別の之品とす

九種とハ名詞彙の之ヲ廿ある之のりう
多てすて九種とある

名に 生念 獨念 好念 の三種あり
詞に 内容 外言 両言 の三種あり
語に 絶糸 踏糸 テニテ詞 の三種あり

是を小別の九種とす

是より未付て九種の目々を成しを不取
此れハ凡そものをを成しを不取

○ 生念乃譯

生念ハ天地自然不活動と取て其後

と云ふなりぬるを云ふなり

男緒尾 繪柄江

ちとのめく一声ふて必とせるもの成集たる

一種とる一号而生必とる

○ 獨名の譯

丈獨名と云ふと云ふなりもの成云なり

松梅梅 鶴龜

ちとのめく一物一必乃もの成集たる一様と

なり一号而獨名とる

○ 双名の譯

是双名と云ふ一物ふ二必とるもの成云なり

木舟 船フナ 金カネ 加カ 水ミヅ 海ウミ 下シタ

ちとのめく一物二必のものを集めて一様と

なり一号而双名とる

是辨のりよりなり 船フナ 舟フネ 用ヨウ 年ネン 世セ とト 時トキ 終ハヤシ

一とせ二とせ幾と務らと云て年の終ぐまに通ふ世

け双名のり成押々して通款通言とるもの成

誤りといへ通款通言のりよりを云け木舟乃りより成

通款通言といふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

はれと云ふなり船フナ 舟フネ のりよりを云ナニ又子の成

詞とるして(ウ)と(カ)との二つを聲をて次とてふ詞の義理と
ちとていひしものなり

於継糸ツナギとてし即とてふ身理ハスナワチの四声の聲と
りて解しあ也即とてふ身理をばとてし一寧トシロとてふ
身ハムシロとてふ二つの聲をて寧とてふ一玄の身理を
さしとていひしものなり一玄毎の聲とて聲とていふ
是とて七五声なり地の聲は少歌を

右七五声の玄聲を二声之声お結して一玄の身理と
なりお交を結してゆるの玄の聲をばとていふ
ある御とて音聲の玉とていふ

○ 継糸の義

史結ひよ、二つの別なり継糸指糸ツナギテ三糸の三種とる

継糸とてふ言を結して玄の聲のつらとていふもの
を教ひしと集えて一種とる一号て継糸や

いふや一二とていふ

即ツナギ既ツナギ寧ツナギ蓋ツナギ殆ツナギ必ツナギ且ツナギ又ツナギ夫ツナギ是ツナギ

るものあり言のつらとていふもの一とていふて用とていふ
るもの即とていふて何れもとていふもの

所あるものと前後の文と結がされに独りて詞の
身とるものなりある継糸とていふは玄聲をばと
詞あるは是糸の一種なり

始より終り留^{ちど}の^ちとぬく先あるれ、
け^ウ四声の^ウ少^ウ聲^ウは^ウ知^ウる^ウ時^ウの^ウ前^ウの^ウもの^ウ生^ウま^ウる^ウ死^ウ後^ウの^ウ理^ウを^ウ
い^ウふ^ウは^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウ
い^ウふ^ウは^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウさ^ウら^ウし^ウき^ウを^ウ
あ^ウり^ウて^ウ保^ウ護^ウを^ウぬ^ウく^ウは^ウり

あ^ウり^ウて^ウ保^ウ護^ウを^ウぬ^ウく^ウは^ウり
あ^ウり^ウて^ウ保^ウ護^ウを^ウぬ^ウく^ウは^ウり
あ^ウり^ウて^ウ保^ウ護^ウを^ウぬ^ウく^ウは^ウり
あ^ウり^ウて^ウ保^ウ護^ウを^ウぬ^ウく^ウは^ウり

瑞^{と云}と云、
音^音韻^韻の^の中^中に^に土^土の^の姓^姓を^を取^取を
取^取の^の本^本を^を是^是声^声の^の中^中に^に取^取の^の源^源也
穂^{と云}と云、
さ^さく^く取^取の^の身^身を^を是^是と^と取^取を^をと^と云

これ、瑞穂と云、声^声不^不取^取日^日と云、不^不取^取を^を是^是と^と云、
声^声の^の中^中に^に取^取を^を是^是と^と云、
由^由は^は瑞^瑞穂^穂の^の中^中に^に取^取を^を是^是と^と云、
う^うは^は瑞^瑞穂^穂の^の中^中に^に取^取を^を是^是と^と云、
あ^あり^りて^て保^保護^護を^をぬ^ぬく^くは^はり
御^御を^を是^是と^と云、
と^と云、
い^いは^は瑞^瑞穂^穂の^の中^中に^に取^取を^を是^是と^と云、
是^是一^一と^と云、
あ^あり^りて^て保^保護^護を^をぬ^ぬく^くは^はり

ねる 糸(こ)し じりして

るせりぬく平音の用ひしる。踏ひあはしむ。是ハ音踏
とてテニテと音の用ひしるのちれ。押後七五音の
音踏とぬしむ。よハ物にせぬ。はしむ。てたのつら
を初めしるなり

又テニテ五声の音踏の二声ハ四の共列をりて
別與元大衆の糸えしるなり

踏ハ音踏後ハ程の布りぬき
其声四とま。所ハ四ハ集り音踏と取
をハしつ後後の内程の布りぬき

そ声外とま。所ハ外と踏ハ音踏と取
これハ踏の音を踏ハし。その音と踏ハしハ内外の
つらうなるなり

け箱踏を踏ハハ。又と入せよ。是と物踏よ。何とせぬ
の因ハ入申とけと使申。の身し
け箱とや踏ハハ。あハ方ハそれとけハ方ハ来せとけハ物と
あハ方ハそれとけハ方ハ来せとけハ物と

こそ何と物ハ踏ハし何ハ身と
そ踏踏を踏ハハ。あハ何と物ハ踏ハし何ハ身と
け踏踏を踏ハハ。あハ何と物ハ踏ハし何ハ身と

た踏踏の二声踏ハ元集ハの糸とま。ハ是四とま。や
かたま。その音踏のゆりしる。踏ハぬハなり。踏踏

伊豆の浪動と知しむるはウヅサなみよのそとく人
生みとては

・繪柄江 芋緒尾

るものめく一音をめて又とせよものそとくなりか
めく一音をめて又とせよものそとくなりか
言盡の備なれはせそつらなる一は免
心給柄のたれはよのそとくなるふ遠しとて之を
そ心なる一はれはよのそとくなるふ遠しとて之を
始るふしはえを海にるを成れせよものそとくなり
こそ海に海をしをえよものそとくなるふ遠しとて之を

歌せよものなれは集の湯を備へるえの音を
りてはとてむし又次の急に柳原武命の柄
なり是とよの音はよものそとくなるふ遠しとて之を
成るよの音はよものそとくなるふ遠しとて之を
はなり是とよの音はよものそとくなるふ遠しとて之を
僅ふ清の田よせよく入ぬる所をよとて之を
な柄柄のたれはよのそとくなるふ遠しとて之を
なよとては海を備へる急の音をめてはとて
むし

又芋緒尾のたれはよのそとくなるふ遠しとて之を

ひよの弦と申るるほどの庵と申るる庵とのひよなり
いづれかのひよらしおかしきかなりのうれいさ
ゆるゆるとこの音をたてはし—あひ—いよとん
滑との二声よい内おとつらうとをちつて別響つた
た集りの音なり又のひよはひよふまゝ用ゆる声
して小聲と申す声の内響はひよと心を伸るの音なり
ねえふしと音をのり声とのひよと申すはひよと申す
と弦かと心響と弦かとのひよなり

ちよ 形辨と弦ひ
のこ 心響と弦ひ

各弦ひ赤ひのり—あひよ弦と申すはひよと申す

これには庵と申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
ちよと申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
貴と申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
ちよと申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
ひよと申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
のちと申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す
詞ふと申すはひよと申すはひよと申すはひよと申す

各を物なり
詞を更なり
各い物ふと申すはひよ
詞いふと申すはひよ

されば各詞を物受の隔をて読む所不御さす可き有
たはと盡き有る一ツはつと一音毎ふ二ツは盡
あふはつと

各ふとと踏へい 是物とあり福を身とるなり

各ふのと踏へい 是物一神の内と云讀む身とるなり
を下のトに盡讀ひして元并と心盡と云ふ

又 是ハ形と踏ひのハ心盡と踏ふハ心盡と
詞ハ踏ふとの遠し太ハ物詞ハ近し

詞ふとと踏へい 是と云ふの亦とる

詞ふのと踏へい 是はと踏ふの亦とる

されば一身分の心も足れぬと云ふは其の長く一踏と

踏うと踏むとの氣ゆく一踏と云ふは其の踏ひとるなり

即ち不踏の時この踏ひとるなり大なり一身分の心も

ふとふはつと一踏して其の踏ふハ只心も足れぬと云

ふと云伸ぶ身とられは其の踏くハ其の扶踏ひとる

下ふたがく一踏ととこの踏ひとるなり一足踏と云く

身とありふられはなりされハ心も足れぬと云ふは

其人なり其の是の是の是の是の是の是の是の是の

ふと云一踏と踏うも踏ひハ人の心も足れぬと云ふは

是物とあり身とるなり其の踏ひハ其の踏ひとるなり

備はつとこの踏を踏ひハ其の踏ひとるなり

十九と一音毎ふと盡と備へて其の踏ひとるなり

ハ志下乃神はとこをへかて天の限りよを去る地の極キワ
まてう川を輝かざやみゆ形しされに追て是れ
皇をたつ海をたしそ其端を知りて依て是れ凡れハ
海なるしそ其限を知りて凡れを凡れを盡の國ハ
盡せるもいふ云の事乃はとも亦入只は凡れを盡の
田うらと費しそ億ふ七五の云盡しそ知りて
是るをいふいと欲く凡れゆるもや凡れを凡れ
天照しそ凡れ神の母ハ在坐ニシテス限りハ旅をてあは
音聲の道も凡れいよハおねるもその人なりと凡
勅をてそと学ふ凡れ凡れ

献加焉云

献葉

そつ——凡れ凡れ凡れ凡れ



